

# 日本保健科学学会誌

2021  
Vol. 24 Suppl

第31回  
日本保健科学学会学術集会  
抄録集

学術集会長 織井 優貴子  
会 期 令和3年10月10日(日)  
会 場 東京都立大学 荒川キャンパス



第31回 日本保健科学学会学術集会実行委員会

# 日本保健科学学会学術集会

2021

Vol.21 Suppl

第31回

日本保健科学学会学術集会

抄録集

学術集会長 織井 優貴子

会 期 令和3年10月10日(日)

会 場 東京都立大学 荒川キャンパス

第31回 日本保健科学学会学術集会実行委員会



## 第31回 日本保健科学学会学術集会

第31回 日本保健科学学会学術集会  
学術集会長 織井 優貴子

本学会は、保健医療の向上と福祉の増進に寄与することを目的に設立された学会で、看護学・理学療法学・作業療法学・放射線学など保健科学に関連するあらゆる分野の実践者・研究者および教育者が一同に集い、学問の交流を通して保健医療の実践を高める場になることを目指しております。

今回の学術集会のテーマは「新生活様式における保健科学」とし、オンラインでの開催といたしました。2020年3月以来、世界中がCOVID-19に脅かされ、生活のあり方が一変しました。同時に、保健・医療の分野においても様々な対応が求められ、試行錯誤しながら対象者の生活や生命の維持向上を目指した取り組みに変化していると考えられます。

本学術集会においては、テーマに関する最新の知識の共有をはじめ、日頃の研究成果の発表の機会としてご参加いただきますようお願いいたします。

**1. 会場** 東京都立大学 荒川キャンパス (〒116-8551 東京都荒川区東尾久 7-2-10)

**2. テーマ** 「新生活様式における保健科学」

### 3. 開催日およびプログラム

令和3年10月10日(日) 10:00-16:00

### 4. 参加費

1) 筆頭演者

・日本保健科学学会会員 (以下、会員)のみ : 1,500円(参加費込)

2) 参加者

・会員 : 1,500円

・非会員 : 2,500円

・大学学部生・専門学校生(学生証提示): 無料

3) 支払方法

・参加登録方法及び参加費支払い方法、学術集会へのログイン方法等は、後日ホームページでお知らせいたします。

### 5. 演題応募要項

1) 資格

・筆頭演者(学術集会当日に発表される方)は日本保健科学学会会員に限ります。共同研究者は、非会員でも可能です。

## 2) 演題応募方法と送付

- ・演題登録および抄録原稿の応募は、学術集会専用のメール(th31nhs-ml@ml.tmu.ac.jp)で受付いたします。発表形式は、口述またはポスター発表のいずれかを選択して頂きます。
- ・抄録は、日本保健科学学会のホームページから抄録のWord 雛型をダウンロードし、記入例を参考に作成してください。
- ・演題登録の際は、メール本文にメールアドレス、連絡先電話番号(FAX 番号)、会員・非会員の区分と、題名、筆頭演者、筆頭演者の所属、キーワード、発表形式の希望(口述発表、ポスター発表、どちらでもよい)を明記し、Word 雛形で作成した抄録を添付した上でth31nhs-ml@ml.tmu.ac.jp に送信してください。学術集会事務局で抄録を確認できましたら、演題受理の連絡を登録されたメールアドレスにお送りします。
- ・演題募集期間 令和3年7月1日(木)～令和3年7月31日(土)17時(締め切り厳守)  
演題受理後の修正は一切受け付けません。

## 3) 応募演題の採択

- ・応募演題は、演題抄録受理後に実行委員会において査読を行い、採否を決定いたします。採択の可否については8月中旬頃より、E-mailにてご連絡します。また、発表形式(口述発表 or ポスター発表)につきましては、必ずしもご希望に添えない可能性がございますことをご了承ください。

## 4) 発表形式

- ・発表形式の詳細については、別途、筆頭演者にお知らせいたします。

## 6. 学会集会に関する連絡・お問い合わせ先

演題申込など学術集会についてのお問い合わせは、下記の第31回日本保健科学学会学術集会実行委員会まで、電子メールでお問い合わせください。

第31回 日本保健科学学会学術集会実行委員会

〒116-8551 東京都荒川区東尾久7-2-10 東京都立大学健康福祉学部看護学科内

E-mail : th31nhs-ml@ml.tmu.ac.jp

## 7. 入会に関する問い合わせ

入会に関する問い合わせ先は、日本保健科学学会事務局までお願いいたします。連絡先はホームページ(<https://www.health-sciences.jp/membership/>)をご参照ください。

なお、学会当日の入会受付は行っておりませんのでご了承ください。

## 第 31 回 日本保健科学学会学術集会 日程

9:00				閲覧可能期間 10月9日（土）10時～ 10月11日（月）10時
10:00	学術集会長挨拶			
	特別講演 「東日本大震災から10年・・・ 医療者に伝えたいこと」			
11:00	10:10～11:10			
		日本保健科学学会 優秀賞・奨励賞 受賞講演 11:15～11:55		
12:00				
13:00	□述発表1（0-1～6） 12:50～13:50			
14:00		□述発表2（0-7～12） 13:50～14:50		
15:00			□述発表3（0-13～18） 14:50～15:50	
			閉会式 15:50～16:00	
16:00				
17:00				

## 一般演題発表プログラム

ポスター発表		閲覧可能期間 10月9日(土)10時~10月11日(月)10時
P-1	X線位相コントラスト画像法に用いるアナライザーの性能評価	森浩一 茨城県立医療大学
P-2	Comparison of Pediatric CT dosimetry between a web-based CT dose calculator and a radiophotoluminescence glass dosimeter	張維珊 東京都立大学大学院
P-3	がんの治療選択時に身近な人の闘病経験から受ける影響要因	栄裕海 東京都立大学大学院
P-4	緊急帝王切開となった母親の心理についての文献検討	中野朋香 東京都保健医療公社豊島病院
P-5	分娩第4期における早期母子接触の実施状況と効果に関する文献検討	池上愛花 東京都保健医療公社豊島病院
P-6	妊娠期における運動習慣と出産との関連についての文献検討	松岡亜紀子 東京かつしか赤十字母子医療センター
P-7	立ち会い分娩が子どもに与える影響についての文献検討	三島楓子 東京かつしか赤十字母子医療センター
P-8	日本人女性の出産満足度に影響を与える要因に関する文献検討	関澤実香 東京かつしか赤十字母子医療センター
P-9	立ち会い出産をする夫への支援に関する文献検討	下園一海 社会福祉法人聖母会聖母病院
P-10	非利き手による歯磨きの歯垢の磨き残し部位の検討~利き手による歯磨きとの比較~	左近帆乃佳 東京都リハビリテーション病院
P-11	他職種における認知症高齢者に対する回想法の実施状況・情報共有と活用法	渡部眸美 東京都立大学大学院
P-12	専門職との出会いにより介護への心情が変化した認知症家族介護者の分析	岡本絵里加 東京都立大学大学院
P-13	発達障害を抱える中学・高校生の地域における社会参加の特徴-健常学生との比較-	高木健志 東京工科大学医療保健学部
P-14	体幹筋収縮と補足運動野の賦活効果の検討~即時的効果について~	熊井 健 東京都立大学大学院
P-15	立位が困難な肢体不自由者のウエスト周囲長と体幹部脂肪率の関係	杉山真理 東京都立大学大学院
P-16	三角筋への筋肉内注射の注射手技に関する文献検討	前田耕助 東京都立大学大学院
P-17	境界型糖尿病のリスク因子に関する文献検討	山田案美加 東京都立大学大学院
P-18	国内文献「包括的性教育」に関する検討	種吉啓子 東京都立大学大学院
P-19	看護技術教育に必要な能力の向上を目指すアクティブラーニング導入の効果	三輪聖恵 東京都立大学大学院

口述発表1		12:50～13:50 会場A
O-1	乳幼児期の母子間のアタッチメントと母子関係との関連性に関する文献レビュー	島山久司 東京保健医療専門職大学
O-2	婦人科がん手術後の排尿障害の体験の意味の成り立ち一家族との関係に焦点をあてて一	和久紀子 獨協医科大学
O-3	認知症における訪問作業療法の実践の傾向～最近10年間の文献レビューより～	若松來夢 東京都立大学大学院
O-4	訪問看護における国内外のシミュレーション教育に関する文献検討	平川善大 東京都立大学大学院
O-5	近年の出産の背景と母親の育児困難感～日本政府統計より～	吉田由美 東京都立大学大学院
O-6	熟練看護師における手術中の看護実践に関する文献研究	福元留美 東京都立大学大学院
口述発表2		13:50～14:50 会場B
O-7	日本国内の作業療法実践における遠隔リハビリテーションの現状を知るための文献レビュー	坂本泰平 東京都立大学大学院
O-8	The Acceptance of Social Robots Use in Therapy: A Literature Review	Dwi Ayu Nur Komariyah 東京都立大学大学院
O-9	The Usability of Playgrounds for Children of All Abilities: A Literature Review	Asma' Nidaul Haq 東京都立大学大学院
O-10	妊産婦の分娩施設選択に影響する要因に関する文献検討 -妊婦健康診査・出産・産後の医療やケアの要因に焦点をあてて-	森田梓 東京大学医学部付属病院
O-11	「暮らしの保健室」の活動報告と今後の活動課題	石井佳子 東京女子医科大学 東医療センター
O-12	集中治療部における新人看護師の経験に関する文献検討	土屋若菜 東京都立大学大学院
口述発表3		14:50～15:50 会場C
O-13	脊椎固定術後早期の神経症状における徒手療法の効果-ランダム化比較試験-	中村拓海 東京都立大学大学院
O-14	前額面での主観的正中定位評価法の検討	沼尾拓 東京都立大学大学院
O-15	頸部筋振動刺激と体幹筋振動刺激の組み合わせが立位足圧中心へ及ぼすonline effectとafter effectの比較	廣澤全紀 東京都立大学大学院
O-16	重度認知症高齢者2事例における非言語的な表出に関する報告	金井千秋 東京都立大学大学院
O-17	介護老人福祉施設を利用している高齢者の潜在ランク理論に依拠した直接生活介助行為のランクに関する研究	張英恩 地域ケア経営マネジメント研究所
O-18	機械学習手法を用いた介護老人福祉施設利用者の要介護度に関する予後的予測モデルの開発	出井涼介 地域ケア経営マネジメント研究所





**学術集会長挨拶**

**10 : 00～10 : 10**

**学術集会長：織井優貴子 東京都立大学大学院**



**特別講演**

**10 : 10 ~ 11 : 10**

**「東日本大震災から 10 年 . . .**

**医療者に伝えたいこと」**

**講師 : 千田 智明 氏**

**岩手県一関市狐禅寺幼稚園 園長**

**座長 : 織井優貴子 東京都立大学大学院**



## 特別講演

「東日本大震災から 10 年・・・

医療者に伝えたいこと」

○千田 智明 1)

1) 岩手県一関市狐禅寺幼稚園 園長

東日本大震災発災の日、私は岩手県大船渡市の赤崎小学校に勤務していました。あの日、地震後に襲来した津波により、赤崎小学校をはじめ、赤崎地区は壊滅的な被害を被りました。幸い、児童と教職員に犠牲者はいませんでした。私も含めて、多くの児童や保護者は避難所生活を送ることになりました。震災前の備えや震災後の医療従事者の取り組みなどを紹介しながら、災害時における心身の健康の維持についてお話しさせていただきます。



## **R3 年度日本保健科学学会優秀賞・奨励賞 受賞講演**

**11 : 15~11 : 55**

**「Comparison of the teaching methods of vaginal palpation versus transabdominal ultrasound for the understanding of pelvic floor muscle contraction -Subjective evaluation from postpartum women-」**

**池田 真弓 帝京大学 助産学専攻科 講師**

**「Content and face validity of an occupational identity questionnaire based on MOHO concept for community-living elderly people requiring support」**

**鹿田 将隆 常葉大学 保健医療学部 作業療法学科 講師**

**座長： 高畠 賢 東京都立大学大学院**





## **一般演題発表（ポスター発表）**

### **閲覧可能期間**

**10月9日（土）10時～10月11日（月）10時**



## P-1

### ×線位相コントラスト画像法に用いるアナライザーの性能評価

○森浩一 1), 中島修一 1), 藤井義大 1), 関根紀夫 2), 小原弘道 3)

1) 茨城県立医療大学保健医療学部放射線技術科学科 2) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科 3) 東京都立大学システムデザイン学部機械システム工学科

キーワード：放射光，位相コントラスト，アナライザー

【目的】シンクロトロン放射光と Laue 型 Si アナライザー（以下、アナライザー）を用いた X 線位相コントラスト画像法において、アナライザー（刃厚  $H = 304 \mu\text{m}$ ）で形成した暗視野像の評価を行った。

【方法】暗視野形成のため X 線エネルギー  $E = 32\text{keV}$ ，刃厚  $H = 304 \mu\text{m}$ （Si 220 回折）で動作するアナライザーを作製し，ノイズと像歪みを計測した。刃の外寸は，縦 54mm，横 70mm（幅 7mm の保護枠含）とした。アナライザーは金属製台座に収めた。

【結果】① 保護枠内の刃（内刃）は、均一性の

良い暗視野を形成した。ただし、保護枠と内刃の接続部端に点の歪みが生じた。② 金属製台座で約 2 か月，垂直保管した後の暗視野像には、接続部全体に歪みが生じた。

【考察】①の歪みは、切削時に生じた歪み，もしくは結晶内の残留歪と推定した。②の歪みは内刃の自重により生じた歪みと推定した。

【結語】XOP2.4 で計算した暗視野条件は成立した。薄刃アナライザーの垂直保管では、接続部に自重による歪が生じ得ることから、力学的に安定した保持・保管方法が求められる。

## P-2

### Comparison of Pediatric CT dosimetry between a web-based CT dose calculator and a radiophotoluminescence glass dosimeter

○張維珊 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科

キーワード：radiophotoluminescence glass dosimeter, Pediatric CT dosimetry, WAZA -ARIV2

【Purpose】In this work, we aim to compare pediatric CT dose using a radiophotoluminescence glass dosimeter (RGD) and a web-based CT dose calculator, WAZA-ARIV2.

【Material and method】In RGD dosimetry, organ doses in a 5-year-old anthropomorphic phantom (ATOM Model 705-D; CIRS, Inc., US) were measured by a newly developed RGD dosimetry system which features less angular dependence. All the experimental measurements for this study were performed using the SOMATOM Definition Flash (Siemens AG, Forchheim, Germany). In the web-based CT dose calculator, a 5-year-old computational

phantom was used. In addition

【Results】The calculation results from WAZA-ARIV2 were relatively lower than the measured results with a range of 8 – 20 %.

【Discussion】The amount of dose difference showed correlation with the difference in effective diameter of the phantom which explains why the calculation results were relatively lower than the measured results within the range of 10 – 20 %.

【Conclusion】The calculation accuracy of WAZA-ARI can be guaranteed when the and the shape of the phantom are taken into consideration.

## P-3

### がんの治療選択時に身近な人の闘病経験から受ける影響要因

○栄裕海 1), 福井里美 2)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域博士前期課程 2) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域

キーワード：がん, 家族, 治療選択, 闘病経験, 影響要因

【目的】がんの治療選択時に身近な人の闘病経験から受ける影響要因について明らかにすることである。

【方法】闘病生活を経験した人が身近にいる方で、今までに自己の治療過程において治療法を選択する機会があったがん患者を対象にスノーボールサンプリングを行い、最終的に5名の研究協力者から承諾が得られた。事前にフェイスシートを用いて協力者の背景を把握したうえで、がん治療選択の経緯について半構造化面接を行い、逐語録を作成した。土屋(2016)のテーマティックアナリシス法を参考に、内容を要約するラベルを付け、抽象化し、分析した。所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得た。(承認番号：20510)

【結果】36コードが得られ、最終的に【治療選択時の前提となる医療との付き合い方】【検診と受診行動】【各治療法に対する意思】の3テーマに分かれる7つのカテゴリからなる影響要因が明らかになった。医療との付き合い方に関わる〔医師や病院の選択〕〔医療者に対する姿勢〕〔情報収集の選択肢〕を学び、〔セルフチェックの重要性〕〔検査受診の選択〕、各治療法に対する意思形成が治療選択に影響していた。

【考察】共同意思決定に向けて医療との付き合い方を提示し、情報ツールや患者会の情報提供をしつつ、患者の価値・意向の把握をし、治療選択に反映していく支援が必要である。

## P-4

### 緊急帝王切開となった母親の心理に関する文献検討

○中野朋香 1), 巖千晶 2)

1) 公益財団法人東京都保健医療公社豊島病院 看護部 2) 東京都立大学助産学専攻科

キーワード：緊急帝王切開, 心理, 母親

【目的】緊急帝王切開で出産した母親の心理的变化を明らかにする。

【方法】医学中央雑誌 Web 版を用い「緊急帝王切開」「心理」をキーワードとして検索し、入手可能な13文献を対象に文献検討を行った。

【結果】緊急帝王切開で出産した母親の心理的变化として、緊急帝王切開決定後～術前では《恐怖》《落胆》《混乱》《安堵》、術後～産後2・3日では新たに《予期的不安》《肯定》、産後2・3日～産後1週では《落胆》《肯定》《愛着》《第1の受容》と分類した。産後1週～産後2週では《落胆の再燃》、産後2週～産後6・8週では《落胆の再燃持続》《母親役割》、産後6・8週～産後1年半では《母親役割》《第2の受容》と分類した。

【考察】《愛着》が母親のストレスを軽減させるため、愛着形成促進に向けたケアが出産体験の受容に効果的である。緊急帝王切開となった母親は出産体験の否定的感情が要因になり、心理的不安定に陥る傾向があるため、産後2週時点での心理的ケアの必要性が高いことが示唆された。

【結語】緊急帝王切開となった母親は出産体験について否定的感情と肯定的感情を併せ持っていることが明らかとなった。《愛着》が母親のストレスの軽減に作用し出産体験の受容に作用する。その後産後2週時点で一時的に《落胆の再燃》がみられるものの、産後1年半までには《第2の受容》が出現し、完全な出産体験の受容に至ると考えられる。

## P-5

### 分娩第4期における早期母子接触の実施状況と効果に関する文献検討

○池上愛花 1)

1) 東京都保健医療公社豊島病院

キーワード：早期母子接触, 効果

【目的】日本国内で実施されている早期母子接触に関する文献検討を行う。

【方法】「早期母子接触」「効果」を検索語に医中誌 Web で抽出された 15 件と、助産学・母性看護学で頻用されている教科書 7 件、周産期領域で重要視されている文献 1 件を用いて、早期母子接触の定義、効果、実施状況等について系統的に整理した。

【結果】早期母子接触の定義は、教科書 7 件で様々な表記されていたが、具体的な実施方法を読み取ることは困難だった。効果も、対象文献 8 件中、「母親の愛着形成促進」、「母子相互作用の促進」など様々あり、統一した見解ではなかった。また、早期母子接触の適応基準を満たし実施している施設は半数以下で、開始時期・持続時間の科学

的根拠は明確にされておらず、学会が提言している推奨時間通りに行っていない施設の割合が一番多かった(厚生労働省,2015)

【考察】学会が推奨する方法で早期母子接触を行っている施設は少なかった。早期母子接触を安全に実施するため、知識の周知を行うこと、助産師一人ひとりが実施方法についての正しい知識と技術を兼ね備え、早期母子接触による母子相互の効果を引き出すように実践することが勧められる。

【結語】早期母子接触の安全性をより担保することが課題である。今後は出生直後だけでなく、長期的な視野で早期母子接触が母子の絆形成にもたらす効果を明らかにする研究を積み重ねていくことが望まれる。

## P-6

### 妊娠期における運動習慣と出産との関連についての文献検討

○松岡亜紀子 1), 巖千晶 2)

1) 東京かつしか赤十字母子医療センター看護部 2) 東京都立大学助産学専攻科

キーワード：出産, 運動習慣, 妊娠期

【目的】妊娠期における運動習慣が出産にもたらす影響を先行研究より明らかにする。

【方法】文献検索データベース医学中央雑誌 Web 版を使用し、「出産」「運動習慣」をキーワードに原著論文を検索し、研究目的と一致した 9 件の文献検討を行った。

【結果】運動習慣が影響を与える要素として【分娩への物理的な影響】と【母親の身体・精神面への影響】【児への影響】の 3 つのカテゴリーに大別された。【分娩への物理的な影響】では 10 個の項目が挙げられ、分娩所要時間短縮、吸引分娩率の増加に影響があった。【母親の身体・精神面への影響】では 18 個の項目が挙げられ、【身体】では母体の体重増加抑制、血圧低下、1 回心拍出量増加、握力・柔軟性・持久力の増加が認められた。【精神面への影響】【児への影響】のカテゴリーにおいて変化は見られなかった。

【考察】妊娠期の運動実施はメリットが多く、運動の種類や実施方法によって得られる効果や効果発現の強度が異なることが示唆された。そのため、今後は妊娠期の運動実施による分娩時間短縮や母体の健康状態向上等のメリットを具体的に説明し、妊娠期に運動実施を動機付けていく必要がある。また、運動種目や強度を標準化して、より焦点を絞って検討していく必要がある。

【結語】妊娠期における運動習慣がもたらす影響として、出産や産婦へのメリットが多く認められた。今後は妊婦に対しての運動実施の動機付け・促進が望まれる。

## P-7

### 立ち会い分娩が子どもに与える影響についての文献検討

#### ○三島楓子 1)

1) 東京かつしか赤十字母子医療センター

キーワード：子ども, 分娩, 立ち会い

【目的】立ち会い分娩が各発達段階の子どもに与える影響について明らかにする。

【方法】医学中央雑誌(Web版)を用い「子ども」「分娩」「立ち会い」をキーワードに原著論文を検索し3件を抽出後、引用文献から3件を抽出し、6件を対象に文献検討を行った。

【結果】分娩中の影響は、幼児前期が【励まし、安全基地を中心とした探索行動、混乱・不安、理解不足による自己中心性】等6カテゴリー、遊戯期が【痛みへの共感、思いやり行動、出産場所からの逃避】等3カテゴリー、学童期が【主体的な役割行動、出産場所からの逃避】等2カテゴリーに分類。分娩直後では、幼児前期が【身体を理解、混乱・恐怖、驚き】等6カテゴリー、

遊戯期が【身体・出産過程の理解、アンビバレントな感情】等6カテゴリー、学童期が【他者への思いやり、罪悪感】等5カテゴリーに分類。産褥期では、幼児前期が【身体・出産過程の理解、気持ちの揺れ】等6カテゴリー、遊戯期が【身体・出産過程の理解、気遣い、血液への恐怖】等10カテゴリー、学童期が【気遣い、成長的行動】等4カテゴリーに分類した。

【考察】全発達段階において立ち会い分娩は自然な性教育となっていた。幼児前期では立ち会いの有無による行動の変化の違いはなかったが、遊戯期以降では他者の感情を理解できる能力が備わっており他者への気遣いが発生した。

## P-8

### 日本人女性の出産満足度に影響を与える要因に関する文献検討

#### ○関澤実香 1)

1) 東京かつしか赤十字母子医療センター1)

キーワード：出産満足度, 出産体験, 文献検討

【目的】日本人女性の出産満足度に関する文献検討を行い、過去の研究動向と、女性の出産満足度を高める要因について整理する。

【方法】医中誌 Web版を使用し、2019年12月までに公表された文献を対象に、「出産満足度」「出産体験」の検索語を用いて検索し、健康な女性が正常分娩を行った際の出産満足度について論じている、入手可能であった11件を対象に文献検討を行った。

【結果】文献検討の結果、以下のことが明らかとなった-1)1989年以前は出産の満足度について全く議論されていなかった、2)女性の出産満足度は、2000年以降に急激に注目されるようになった、3)2005年以降は発表された研究の数に大きな変化が見られなかった、4)健康な女性が出産を行う場合、女性の出産満足度を高める要因は、妊娠期では「産科歴」が、分娩期では「医療介入なし・出産体験の自己評価・信頼できる医療者」が、産褥期では「分娩時間の短さ」が最も多かった。

【考察】助産実践への示唆として妊娠期から医療介入の必要性について説明すること、女性自身が自分の力で産んだと実感できるように支援すること、立ち会う家族がより効果的に出産をサポートし、家族の絆を深めるきっかけとなるように関わる支援が重要である。

【結語】本研究により今後の課題として、変わりゆくニーズの最新の状況に対応するために、より現状に適った出産満足度に対する要因について明らかにする必要があることが読み取れた。

## P-9

### 立ち会い出産をする夫への支援に関する文献検討

○下園一海 1)

1) 社会福祉法人聖母会聖母病院

キーワード：立ち会い分娩, 夫

【目的】本研究では和文献を対象に文献検討を行い、「夫が分娩に立ち会う要因」と「その効果」を抽出し整理することを目的とした。

【方法】医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) を用いて「立ち会い分娩」「夫」をキーワードに検索を行い、文献 14 件を選定した。また助産学領域にて頻用の教科書 1 件を加え、計 15 件を分析対象とした。

【結果】立ち会い群が分娩の立ち会いを希望する内的要因は「妻との経験共有」等が、外的要因は「夫婦で決めた」等が挙げられた。非立ち会い群が分娩に立ち会うことを希望しない内的要因は「自分が嫌」等が、外的要因は「妻が嫌がっている」等がだった。夫が立ち会う産婦には、「夫への感謝」等の効果が、夫への効果としては「父親の自覚」等の効果が明らかにされて

いた。ポジティブな影響が得られた一方で、「セックスストレス」等のネガティブな影響も明らかにされていた。

【考察】夫が分娩に立ち会うことは、夫の父親役割獲得の促進、夫婦関係性の向上、出生児の健やかな成長発達に寄与する。ネガティブな影響については、医療者による夫への分娩経過の現状説明等により予防することも可能である。立ち会い分娩を希望しない夫に対しては、その理由を聴取し個別性を加味した出産準備教育を提供することが望まれる。

【結語】夫が分娩に立ち会う効果を考えると、夫の立ち会いが可能となる環境のもとでは、支援者は夫が妻の分娩に立ち会うことを推奨することが望ましいといえる。

## P-10

### 非利き手による歯磨きの歯垢の磨き残し部位の検討～利き手による歯磨きとの比較～

○左近帆乃佳 1), 前田耕助 2)

1) 東京都リハビリテーション病院 2) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域

キーワード：歯磨き, 非利き手, 磨き残し

【目的】本研究では、非利き手で歯磨きを行う必要のある患者への効果的な歯磨き指導への示唆を得るため、非利き手による歯磨きの磨き残しの多い部位ならびに主観的な感覚を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者 12 名に利き手と非利き手での歯磨きの両方を実施してもらった。Plaque Control Record を用いて歯垢を検出し、口腔全体と同一部位における歯垢の減少率を利き手・非利き手間で比較した。また、VAS を用いて、歯磨き後の主観的な疲労感と磨けたかどうかの感覚を比較した。統計学的分析には Wilcoxon の符号付き順位検定を用いた。本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】口腔全体の歯垢の減少率は、利き手 61%、非利き手 50% で、利き手と比べて非利き手で有意に歯垢の減少率が低かった ( $p=0.004$ )。同一部位では、作業手側下顎臼歯舌面で利き手 (38%) と比べて非利き手 (29%) で有意に低かった ( $p=0.038$ )。疲労感 ( $p=0.002$ ) および磨けていない感じ ( $p=0.002$ ) は非利き手の方が有意に高かった。

【考察】非利き手での歯磨きは利き手に比べて、全体的な磨き残しが多く、疲労感や磨けていない感じが強いことが明らかになった。特に作業手側下顎臼歯舌面は、手首を内側に反転して磨くといった刷掃動作が必要なため、磨き残しが多い可能性が示唆された。



## P-11

他職種における認知症高齢者に対する回想法の実施状況・情報共有と活用法

○渡部眸美 1), 増谷順子 2)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域博士前期課程 2) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域

キーワード：認知症高齢者, 非薬物療法, 回想法

【目的】他職種における回想法の実施状況とそれについての情報共有, また他職種におけるケアへの活用法を明らかにすることである。

【研究方法】研究デザインは質的記述研究である。研究対象者は認知症専門の1精神科病院に勤務する作業療法士3名であった。作業療法士が1病棟に入院中の認知症高齢者5名に対して実施していた回想法の参加観察と作業療法士への半構造化面接を用いてデータ収集した。研究対象者には研究趣旨と方法について口頭と文書にて説明し同意を得た。

【結果】半構造化面接の結果, 1) 回想法を通して得られた情報は【その人しさの把握】など4カテゴリ, 2) 他職種間における回想法で得られた情報の共有法は【記録媒体】【カンファレンス】など3カテゴリ, 3) 他職種間における

回想法で得られた情報のケアへ活用は【その人に合ったケア提供】など2カテゴリ, 4) 今後の回想法における情報共有の課題は【他職種間での情報共有の困難さ】の1カテゴリが抽出された。

【考察】作業療法士は病棟配属という勤務形態をとっていたため, 日々, 患者との関わりをもち状態把握が可能であり, また回想法で得られた情報を日常場面で活かすことができている。回想法中, 認知症高齢者は普段では見られない生き生きとした表情や言動がみられていたことから, 回想法中の情報を作業療法士と他職種が共有し, 日常ケアに活かせるような仕組みを構築していく必要がある。

## P-12

専門職との出会いにより介護への心情が変化した認知症家族介護者の分析

○岡本絵里加 1), 井上薫 2), 佐々木千寿 3)

1) 東京家政大学 健康科学部リハビリテーション学科 2) 東京都立大学 健康福祉学部作業療法学科 3) 訪問看護ステーションナース花きりん

キーワード：認知症, 家族介護者, 心情

【はじめに】認知症をもつ家族介護者(以下, 介護者)の介護負担は, 介護者の肯定的な認識が負担を軽減することが報告され, 肯定的な認識を高める方法を考えることが重要とされている(櫻井, 1999)。本研究は, 介護者の悲観的な感情から肯定的な感情へ至った心情の変化について, ナラティブスロープ(以下, スロープ)を用いて分析を行ったため, 報告する。

【方法】対象は, 前頭側頭型認知症の妻を介護していた50代の男性である。現在, 妻は要介護5で療養型の病院に入院中であり, 入院前は在宅生活を送っていた。本研究では, 約40分の半構成的インタビューを実施し, スロープを作成してもらった。なお, 本研究は倫理審査委員会の承認と本事例の同意を得て実施した。

【結果】スロープの初期は, 妻が食事の拒否や

痲癩を起し, 自傷行為もみられ, その状況への不安感と悲観的な感情でスロープは下降していたものの, 家族の会や病院の医師や看護師, 作業療法士との出会いをきっかけに肯定的な感情へと変化し, スロープは上昇していた。

【考察】スロープの分析から, 専門職からの助言や関わりにより介護の問題に対する対処方法が可能となったことで, 肯定的な感情へと至っていた。介護者の肯定的な認識と介護の対処方法の関連においては, 介護役割を積極的に行い, 専門家との相談などを利用し, 多様な対処方法を活用している介護者は介護の喜びや満足感が高いとされている(菅沼ら, 2011)。専門職は, 現在までの介護生活のプロセスや様々な場面での心情を把握し, 肯定的な感情へ高められるよう支援していくことが必要である。

## P-13

発達障害を抱える中学・高校生地域の社会参加の特徴-健常学生との比較-

○高木健志 1), 新田収 2), 楠本泰士 3)

1) 東京工科大学医療保健学部 2) 東京都立大学人間健康科学研究科 3) 福島県立医科大学保健科学部

キーワード：発達障害, 参加, 地域

【目的】発達障害を抱える学生(中学・高校生)の地域における参加の特徴を明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。

【方法】アンケート配布対象者は、1都1県の中学校・高校・放課後等デイサービスに通学する健常学生の保護者と発達障害を抱える学生の保護者(45名)とした。アンケートでは学生の年齢・疾患名・地域における参加(Participation and Environment Measure for Children and Youth:PEM-CY)を調査した。統計処理では、従属変数をPEM-CYの地域参加項目数(最大値:10)、独立変数を障害の有無としたMann-Whitney U検定を行った。さらに、PEM-CYの下位項目と障害の有無との間の独立性を検討するためにFisherの検定を行った。

【結果】32件(健常学生:19名,発達障害を抱える学生:12名)の有効回答が得られた。

PEM-CYは健常学生が5(5-7)(四分位範囲)、発達障害を抱える学生が3(2-4.3)であった。Mann-Whitney U検定の結果、2群の間に有意な差を認めた( $p<0.01$ )。Fisherの検定の結果、PEM-CY下位項目(グループ活動やボランティア、サッカーなどの組織的な遊び、他の学生との集まり)と障害の有無の間に有意な関係性が認められ( $p<0.05$ )、発達障害を抱える児童は参加が制限される傾向があった。

【考察】今回の結果から、学生のみで参加するような項目は発達障害を抱えていると参加できない学生が増加していることが明らかとなった。発達障害による感覚の偏りに加え、コミュニケーションの困難さによる影響で、親しい間柄の人物がいない活動への参加が制限されたと考えられる。

## P-14

体幹筋収縮と補足運動野の賦活効果の検討～即時的効果について～

○熊井健 1), 池田由美 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科

キーワード：補足運動野, 体幹筋活動, 同時収縮

【目的】補足運動野(SMA)の活動は姿勢制御や歩行能力の向上との関連が報告され、これまで経頭蓋磁気刺激法や近赤外分光分析装置(fNIRS)による賦活方法が研究されてきた(Nomura et al. 2018)。解剖学的にSMAは皮質網様体路の起始で体幹筋と関連する(Jang et al. 2019)とされている。そこで本研究では体幹筋の筋収縮によるSMAの賦活効果について検討することを目的とした。

【方法】健常男性20名(24.2±3.7歳)を対象とし、直立座位姿勢、体幹筋の随意収縮を伴う腹部引き込み動作、足関節底屈動作を行った。各課題肢位は15秒間保持させ、3セット行った。課題時の前頭前野、SMA、一次運動野の脳活動(効果量)と内腹斜筋、脊柱起立筋、腓腹筋の活動を安静時と課題時で比較し、脳活動と筋活

動の相関分析を行った。

【結果】腹部引き込み動作で、体幹筋活動は有意に増加し、SMAの脳活動効果量が有意に増加した。また、内腹斜筋の筋活動はSMAの活動と有意な負の相関を示し( $r=0.62, p=0.01$ )、体幹の同時収縮指数と有意な負の相関( $r=0.75, p=0.01$ )を示した。

【考察と結語】体幹筋の随意収縮でSMAが賦活すること、また、単一の体幹筋の筋活動よりも、主動筋と拮抗筋の同時収縮がよりSMAの活動に関与している可能性が示唆された。

## P-15

### 立位が困難な肢体不自由者のウエスト周囲長と体幹部脂肪率の関係

○杉山真理 1) 2), 古川順光 1), 新田収 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科 理学療法科学域 2) 東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部理学療法学科

キーワード：ウエスト周囲長，肢体不自由者，体幹部脂肪率

【目的】立位保持困難な肢体不自由者のウエスト周囲長 (waist circumference, WC) の測定姿勢による違いを検証し、WC と体幹部脂肪率 (trunk fat percentage, TF) の関係を明らかにすること。

【方法】対象は脊髄損傷者 (SCI) 42 名、脳血管障害者 (CVD) 42 名とした。座位、背臥位での WC [cm] を測定し、TF [%] を腹部脂肪計 (タニタ製 AB-140) で測定した。WC の姿勢間の比較は t 検定、TF と WC との関係は相関分析を用いて検証した ( $p < 0.05$ )。

【結果】SCI の WC の平均値は座位：90.9cm、背臥位：81.6cm、CVD では座位：93.4cm、背臥位：86.5cm で、いずれも座位が高値だった。WC と TF の相関係数は、SCI では座位・背臥

位：0.87、CVD では座位・背臥位：0.78 であった。

【考察】座位の WC が高値だったのは、股関節と脊柱の屈曲を伴う座位では腹部の軟部組織が凝集したこと、抗重力姿勢のため重力の影響で内臓が下方移動したことによると考えた。座位・背臥位で測定した WC は TF を反映したものであったが、SCI では麻痺域に脂肪が蓄積し易く、体幹部の脂肪細胞は末梢部よりも代謝が活発で肥大しやすいとの報告から、SCI や CVD の体幹機能との関連を検討する必要がある。

【結語】WC は測定姿勢間で違いがあり、両姿勢とも WC と TF との間には正相関があった。

## P-16

### 三角筋への筋肉内注射の注射手技に関する文献検討

○前田耕助 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科

キーワード：筋肉内注射，三角筋，注射手技

【目的】三角筋への筋肉内注射は、神経障害や組織障害の危険性があり、安全で確実な注射手技を確立することは重要である。今回、三角筋への筋肉内注射の手技に関する研究の動向ならびに課題を検討する目的に文献検討を行った。

【方法】医中誌、CiNii、PubMed、Science Direct で「筋肉内注射 (intramuscular)」「三角筋 (deltoid muscle)」をキーワードに 2000～2020 年の発表論文を検索した。該当した 167 件中、原著論文で、日本人を対象に注射手技に注目した論文 10 件を対象とした。

【結果】三角筋部の神経・血管の走行を検討した研究すべてで、注射部位は対象者ごとに相対的に求める方法が望ましいと報告していた。皮下脂肪厚・三角筋の厚さを検討した研究では、対象者の BMI の違いもしくは男女間で、刺入深度は異なると報告していた。注射手技の一部である、注射時の対象者の腕の位置や、実施者の注射部位の把持方法による比較・検証はされ

ていなかった。

【考察】三角筋への筋肉内注射を安全に実施するには、注射部位ならびに刺入深度を対象者の個人の特性から判断する必要があることが示唆された。一方で、注射部位と刺入深度以外の注射手技の詳細は明らかでなく、注射時の対象者の腕の位置や、実施者の注射部位の把持方法などの検討が、より安全な注射手技を確立するためには必要であることが示唆された。

## P-17

### 境界型糖尿病のリスク因子に関する文献検討

○山田案美加 1)

1) 東京都立大学人間健康科学研究科看護科学域博士後期課程

キーワード：耐糖能異常，空腹時血糖異常，リスク因子

【背景】日本の糖尿病患者数は、2017年に過去最多となった。今後も、さらに患者の増加が予測され、発症予防が課題である。

【目的】境界型糖尿病のリスク因子に関する文献を検討し、生活習慣についてのリスク因子を調査すること

【方法】医学中央雑誌 Web 版を検索データベースとし、キーワードは「耐糖能異常」OR「空腹時血糖異常」AND「リスク因子」、2010年4月-2021年3月に該当する会議録、原著論文52件を対象とした。

【結果】境界型糖尿病のリスク因子として、主に、食習慣・栄養素面、運動習慣、基本属性、検査値、その他5つに区分された。食習慣では、摂取スピード、夕食時間、欠食、嗜好品、酒、

栄養素面では、脂肪酸、食塩、食物繊維、たんぱく、カルシウム、砂糖が関連していた。運動習慣では、実施率、通勤・歩行時間や自転車・自動車利用が関連していた。基本属性では、性別、年齢、家族歴、血圧、体脂肪、腹囲、体重増減、脂質異常、高尿酸血症、BMI、脂肪肝、幼少期栄養環境が関連していた。検査値では、TG、HbA1c、FPG、インスリン分泌能・抵抗性、Cr、ビタミンK、アディポネクチン、肝機能、LDLCが関連し、その他では、喫煙、睡眠が関連していた。

【考察】リスク因子は5つに区分され、生活習慣との関連が明らかとなった。【結語】境界型糖尿病のリスク因子として生活習慣の中でも特に食習慣・栄養素面との関連が明らかになった。

## P-18

### 国内文献「包括的性教育」に関する検討

○種吉啓子 1)、伊藤正恵 2)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域 2) 心身障害児総合医療療育センター小児看護専門看護師

キーワード：包括的性教育，文献検討

包括的性教育とは「セクシュアリティの認知的、感情的、身体的、社会的諸側面についての、カリキュラムをベースにした教育と学習のプロセス」と定義1)されており、人権的アプローチとジェンダー平等を基盤に、子どもが自分の意思決定や他者に尊敬と受容をもって接することができるスキルと態度の構築2)を期待している。そこで、包括的性教育の研究動向を明らかにすることは、子どもの未来と育ちを支援するために重要な示唆を得られると考えた。

【目的】国内文献における包括的性教育の研究動向を明らかにする。

【方法】医中誌、メディカルオンライン、CiNii Articles、J-STAGE を用いて、“包括的性教育”をキーワードに検索(2021.7.1)を行い、110文献を対象とした。

【結果・考察】①年次別では、年々増加傾向にあることが明らかになった。②種類別では解説・総説が最も多く、研究の蓄積が課題であることが示唆された。③近年の研究では、特別支援学校中等部生徒や児童養護施設入所児童への支援など、支援の複雑化・深刻化が示唆された。

【結語】子どもの抱える課題や取り巻く環境を鑑みて、日本における包括的性教育の現状と具体的な方策を明らかにする研究の蓄積が早急に求められていると考える。

1)ユネスコ編/浅井春夫他訳:改訂版国際セクシュアリティ教育ガイダンス:28,明石書店,東京,2020.

2)前掲1)のP30-31

## 看護技術教育に必要な能力の向上を目指すアクティブラーニング導入の効果

○三輪聖恵 1) 前田耕助 1) 大庭貴子 1) 野村亜由美 1) 習田明裕 1)

キーワード：看護技術教育，アクティブラーニング，効果

【目的】看護技術教育に Active Learning (以下 AL) を取り入れることにより看護者としての態度や価値観、コミュニケーションスキルの向上、看護技術提供に必要な知識の定着に効果があるのかを検討した。

【方法】東京都立大学看護学科 2 年次に開講している看護基礎援助学および基礎看護学実習において、自作動画の視聴及びディスカッションを取り入れた技術演習、臨床実習に加え、看護技術検証やプレゼンテーション、ディスカッションを取り入れた学内実習を行った。これらの科目を履修した学生全員を対象に質問紙調査を行った。調査は、すべての成績登録が終了後に実施し、研究への協力が成績に影響しないことを担保した。

【結果】研究への同意の得られた 82 名から得

られたデータを分析に用いた。AL ではグループディスカッションが自身のコミュニケーション能力の向上につながり、他のグループの看護技術に関するプレゼンテーションを聞き、看護技術に対する知識や理解を深めていた。また、看護技術の根拠や技術の検証を通じて学習へのモチベーションを向上させていた。

【考察】看護技術教育では、教員からの一方向的な看護技術の教授だけではなく、学生の援助の実施とグループでのディスカッションで技術を振り返りながら自身の考えや工夫点を見出すことは、看護を創造する能力構築に効果的であったと考える。

【結語】看護技術教育に AL を取り入れることは、看護学生の看護を創造する能力に効果があった。



## **一般演題発表（口述発表）**

**12 : 50～15 : 50**

**口述発表 1（0-1～6）：会場 A（12 : 50～13 : 50）**

**座長： 山西葉子 東京都立大学大学院**

**口述発表 2（0-7～12）：会場 B（13 : 50～14 : 50）**

**座長： 伊藤祐子 東京都立大学大学院**

**口述発表 3（0-13～18）：会場 C（14 : 50～15 : 50）**

**座長： 来間弘展 東京都立大学大学院**





## O-1

乳幼児期の母子間のアタッチメントと母子関係との関連性に関する文献レビュー

○畠山久司 1)2), 伊藤祐子 3)

1) 東京保健医療専門職大学 リハビリテーション学部 作業療学科 2) 東京都立大学院 人間健康科学研究科 作業療法科学域 博士前期課程 3) 東京都立大学院 人間健康科学研究科 作業療法科学域

キーワード：アタッチメント，母子関係，文献研究

【目的】本邦における乳幼児期の母子間のアタッチメントと母子関係との関係性を調査することを目的とする。

【方法】アタッチメントと母子関係の関連性に関する文献レビューを実施した。医学中央雑誌 Web 版を用い、2001～2021 年の 20 年間、原著論文を対象とした。検索用語は、(母子関係 OR 親子関係) AND (アタッチメント OR 愛着) とした。選定基準は、(a)乳幼児期の定型発達児を対象、(b)アタッチメントの対象が母親、(c)アタッチメントと母子関係の関係を調査したものとした。対象文献からアタッチメントと母子関係に関する内容を抽出し分析した。

【結果】検索は 2021 年 6 月に行われ、668 編が該当し、最終的に 19 編が分析対象となった。研究対象は、乳児 7 編、乳幼児 6 編、幼児 4 編、

文献レビュー 2 編であった。発表時期は、2001～2015 年 9 編、2016～2021 年 10 編であった。内容は、(1)アタッチメントと母子関係との関係性、(2)アタッチメントが母親に与える影響、(3)母親自身の要因の 3 つに分類された。(1)は、アタッチメントは、相互的な母子交流や養育行動、虐待行為と関係した。(2)は、安定したアタッチメントは、母親自身の役割の達成感や肯定的な育児感情と関係した。(3)は、母親自身の被養育経験やうつ傾向などは母子間のアタッチメントと関係した。

【考察】アタッチメントは母子関係と明確に関係しており、乳幼児期のアタッチメントの重要性が改めて示された。また、母親自身の要因を評価することが重要であると考えられた。

## O-2

婦人科がん手術後の排尿障害の体験の意味の成り立ち一家族との関係に  
焦点をあてて一

○和久紀子 1)

1) 獨協医科大学看護学部

キーワード：婦人科がん，排尿障害，家族

【目的】家族の存在の再発見という A さんの婦人科がん手術後の排尿障害の意味の成り立ちを記述すること

【方法】現象学的看護研究である。研究参加者は準広汎子宮全摘出手術を受けた A さんであり、データ収集期間は手術後から 2 年半である。病棟および外来で参加観察と非構造化面接法を用いて収集したデータを熟読し、全体を把握した後、排尿障害とともに家族のことが語られたデータに注目して分析した。所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】子どものトイレトレーニングが間もなく始まるのが、排尿障害を自覚した A さんの気持ちの切り替えを助けていた。退院後、A さんは身体の制限から子育てを十分行えないことが辛く、子どもに対して申し訳なさを感じ

ていた。母の「フルサポート」に感謝しつつも、子どものことが気になり、残尿を気にしつつも「テキトー」なところで「おしっこ」を「切り上げる」ようになっていた。そんな中で A さんは夜間に「お漏らし」をした。その事実の「辛」さを軽くしたのはその場で「尿取りパット買って！」と言えた夫との関係だった。また、その後、夜間にトイレに行くことを促し、お漏らしの「怖」さを軽くしたのは、授乳時間であった。一年後、夜中の尿意は戻ったが、尿意の強さは戻らなかった。しかし、A さんは、「排尿障害は終わったこと」といい、子育てをする身において、その状態を手術前よりも「いい」ものと位置付けていた。

## O-3

認知症における訪問作業療法の実践の傾向～最近10年間の文献レビューより～

○若松来夢 1)2), 石橋裕 1), 坂本泰平 1)3)

1) 東京都立大学人間健康科学研究科作業療法科学域 2) IMS (イムス) グループ医療法人社団明和会西八王子病院 3) 医療法人社団哺育会浅草病院

キーワード：訪問作業療法, 認知症, 効果

【はじめに】WHOは認知症には根治的な治療法はないが修正可能な危険因子を積極的に管理することで、発症や進行を遅らせることができるとしている。そこで本報告では、認知症に対する訪問作業療法実践の傾向を明らかにするため文献レビューを行なった。

【方法】分析対象の文献を1.認知症と診断された人を対象2.作業療法士主体の介入研究であることと定め、医中誌 web・CiNii を用いて検索した。キーワードは「認知症・認知症患者」「訪問」「作業療法」を組み合わせ、期間は2011～2020年の10年間、論文種類は原著論文のみとし検索した。また病院等での介入、介入や効果の記載がないものを除外した。該当文献について、作業療法ガイドラインを参考に要約表を作成し作業療法士2名で検討した。

【結果】抽出した文献は9件で研究デザインは症例研究・エビデンスレベル5のみであった。介入内容は2015年以前では体操や回想活動が多く2016年以降は家族指導等の介入が多かった。また、統計学的処理が実施された文献はなかった。

【考察】作業療法ガイドラインでは地域在住高齢に対して認知機能低下を予防する介入として人間作業モデルを用いたプログラムや脳活性化リハビリテーションの考えを取り入れた歩行習慣化を目指したプログラムを行うよう強く勧められるとしている。しかし、今回の文献レビューではそのような介入はなかった。よって今後は、エビデンスに基づいた有用なプログラムを検討する必要があると考える。

## O-4

訪問看護における国内外のシミュレーション教育に関する文献検討

○平川善大 1), 織井優貴子 2)

1) 東京都立大学大学院 人間健康科学研究科 看護科学域 博士後期課程

2) 東京都立大学大学院 人間健康科学研究科

キーワード：シミュレーション教育、訪問看護師、継続教育

【目的】看護基礎教育や病院研修においてシミュレーション教育を実施することは一般的となってきた。一方、訪問看護師教育の領域では、日本国内と国外ではシミュレーション教育の実施に差がみられる。本研究は、訪問看護師教育とシミュレーション教育の社会的背景と国内外の研究動向を明らかにすることを目的とする。

【方法】看護シミュレーション教育の国内外の研究動向を比較するため、医中誌 WEB 版と ScienceDirect を用いて「看護」AND「シミュレーション教育」をキーワードとして検索し年次推移をグラフ化した。また、訪問看護におけるシミュレーション教育の現状を比較するため「訪問看護」OR「在宅看護」AND「シミュレーション教育」をキーワードとし、抽出された

文献抄録（国内8件、国外177件）を概観し、入手可能な国内4件と国外10件を分析した。

【結果】看護シミュレーション教育に関する文献数は、国内外ともに年々増加している。日本では成人看護領域に関する実践報告が中心であり、国外では様々な看護領域での研究報告がみられた。訪問看護におけるシミュレーション教育に関する研究は、日本ではこれまでのところ演習や研修参加者の主観的な満足度調査が主である一方、国外では客観的な指標を使用した学習効果の比較が実施されていた。

【考察・結語】国外の取り組みや研究を参考に、日本の訪問看護においてもシミュレーション教育の取り組みや研究を拡大していくことは有益であると考えられる。

## O-5

### 近年の出産の背景と母親の育児困難感 ～日本政府統計より～

○吉田由美 1) 安達久美子 1)

1) 東京都立大学人間健康科学研究科看護科学域

キーワード：出産，母親，育児困難感

【目的】出産の背景や、母親を取り巻く環境は大きく変化している。本研究では、日本政府統計を用い、近年の出産や母親の育児困難感の変遷について分析し、今後の支援のあり方を検討する。

【方法】日本政府統計ポータルサイトに掲載されている統計を使用し、経年変化等について分析した。

【結果】母親の出産年齢は、2000年頃までは25～29歳が最も多かったが、2005年に30～34歳が最も多くなり、それ以降30歳以上の女性の出生率が増加している。女性の年齢階級別就業率は、過去20年間で、すべての年齢階級で上昇を示し、出産後も仕事を継続する人は21.8%と増加した。母親の出産・育児の不安や苦勞の要因としては、「体力的に自身がない」「精

神的負担が大きい」「手伝ってくれる人がいない」が増加を認め、「経済的負担が大きい」が2.4%減少した。

【考察】近年、女性の社会進出が急速に進み、出産は高齢化してきている。それに伴い、育児への不安や苦勞の内容も変化し、身体的側面での困難感や育児を行う上でのサポート不足など新たな問題に直面している。一方、出産年齢の上昇と女性の就勞によって、20代に比較し所得が増加することから、経済的な困難感が減少したと考えられた。

【結語】出産年齢の変化に伴い、母親の感じる育児への困難感の内容は変化してきている。その変化を捉えながら、母親に寄り添い、社会全体で母親を支えていくことが今後求められる。

## O-6

### 熟練看護師における手術中の看護実践に関する文献検討

○福元留美 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科

キーワード：手術中，看護実践，熟練看護師

【目的】熟練した手術室看護師を対象とし、言語化が難しいとされる手術中の看護実践についての動向と課題を探求すること。

【方法】手術中の看護における先行研究を、医中誌Web・CiNii Article・PubMed・CINAHL Plus with Full Textを用い、key wordは、「手術室看護」と「看護実践」「意味」「実践知」「経験知」「臨床知」「臨床実践」「臨床判断」「臨床知識」「暗黙知」のそれぞれをand検索し、2020年までの原著論文を検索した。

【結果】対象文献は51件で、研究内容は、熟練した手術室看護師の手術中における「外回りの看護実践」「器械出しの看護実践」「倫理的要素・課題」「専門性・自律性」「魅力・やりがい」の5つの切り口に分けられた。

【考察】患者の尊厳を保ち安全を守るという意識は、どの研究においても高かった。また、手術室看護師は、自己の知識や技術を向上させ、チーム力を高めることに尽力していることも先行研究から読み取れた。

他方で、手術室内で起きている事象に対し、手術中の流れ全体から状況の変化に応じたその都度の看護実践を、手術中の流れの文脈を断ち切らず詳細に記述し分析したものはみあたらなかった。

【結語】手術中に展開される熟練看護師の看護実践を、手術中の流れの文脈を断ち切らず詳細をありのままに記述し分析することは、手術中の看護を理解する助けになると考えた。

## O-7

### 日本国内の作業療法実践における遠隔リハビリテーションの現状を知るための 文献レビュー

○坂本泰平 1)2), 石橋裕 1), 若松来夢 1)3)

1) 東京都立大学人間健康科学研究科作業療法科学域, 2) 医療法人社団哺育会浅草病院, 3) IMS グループ西八王子病院

キーワード：遠隔リハビリテーション, 作業療法

【目的】現在日本国内において COVID-19 の影響もあり、接触感染対策としての遠隔リハビリテーション(以下遠隔リハ)が注目されている。本研究の目的は日本国内の作業療法実践における遠隔リハの現状を調査し、明らかにすることである。

【方法】文献検索は CiNii、メディカルオンライン、医中誌 Web を用い、キーワードは「遠隔リハ」「遠隔医療」「作業療法」を組み合わせ、検索可能な年に発表されたすべての論文を対象に、2021年6月19日に実施した。重複論文を除外し、タイトルと抄録を確認しスクリーニングを行い、作業療法士が介入をしていないものと対象者に検証していないものを除外基準として内容吟味を行った。内容の分類は Goris Hung KN らの Effects of telerehabilitation in occupational therapy practice: A systematic

review に準拠し行なった。データ抽出は独立した作業療法士2名が同時並行で行なった。

【結果】11件の論文が対象となった。対象となった研究は、作業療法の実践において遠隔リハの効果・受容が期待されるものであったが、症例報告が10件、郡内前後比較試験が1件のみであった。

【考察】今回の調査により日本国内の作業療法実践においてレベル3以上の統計学的手法を用いて遠隔リハの有効性を判断するような論文はなく、今後、様々な病気や症状、障害に対する遠隔リハの作業療法の有効性や介入方法についての研究が必要であると考ええる。

【結語】今回の研究では入手困難なものもあり、研究の対象となる全ての文献を抽出することができなかったと考える。

## O-8

### The Acceptance of Social Robots Use in Therapy: A Literature Review

○ Dwi Ayu Nur Komariyah 1), Kaoru Inoue 2), Natsuka Suyama 2)

1) Master's Course of The Department of Occupational Therapy, Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University, 2) Department of Occupational Therapy, Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

キーワード：Acceptance, social robot, therapy, children

【Background】Social robots use in therapy has been developed for the last decade, some challenges regarding on the acceptance of the robots reported to be crucial to the impact for children. This review aims to explore the acceptability of the use of social robots in pediatric rehabilitation or therapy and states the way on facilitating social robot acceptance into practice.

【Methods】The databases used to search for studies were ScienceDirect, Web of Science, SpringerLink, Pubmed, and Scopus. The search was done between 14th-19th of June 2021 operated the keywords of “acceptance”, “social

robot”, “children”, and “therapy”. Inclusion criteria were research articles on acceptance of social robots use in rehabilitation or therapy for children written in English within the 2017-2021 limits.

【Results】The numbers of records identified from the databases were 238 articles. Articles with incomplete data extraction or vague results, and review articles were excluded. The results of the studies included were 10 articles. Challenges for adoption come from the perspective of the children, their parents, and healthcare professionals. On the children and parents side, acceptance influenced by perceived usefulness,

economic value, and appearances. Healthcare professionals hesitation to adopt the robots mainly caused by the risk of job loss, feelings of anxiety, and security.

**【Conclusion】** This review discloses research 3 gaps: a) acceptance through the eyes of occupational therapy remain unexplored, b) few studies implement the robots within adequate duration and frequency, c) the effective method

to adopt the robots still unclear. Most studies implementation and observation on the social robot interaction happen in a barely adequate time, vary from days, even minutes. Future research should put more emphasis on the duration given for whether children, parents, and healthcare professionals. Interaction process and method should take into notice more

## O-9

### The Usability of Playgrounds for Children of All Abilities: A Literature Review

○ Asma' Nidaul Haq 1), Natsuka Suyama 2), Yuko Ito 2)

1)Master's Course of Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University, 2)Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

キーワード : Playground, children, usability

**【 Background 】** Playground provides the opportunity for children to meet, play, and interact with each other, promoting the development of motor and social skills. However, children with disabilities often experience various barriers that make the playground unusable for them and limit their participation.

**【Purpose】** This review aimed to explore the evidence regarding the usability of playgrounds for children of all abilities, including factors that facilitate or hinder participation and inclusion in playgrounds.

**【Method】** A database search was conducted in June 2021 on Scopus and Web of Science using the keywords: ((playground OR park OR "play area") AND (design OR environment)) AND (usab\* OR inclusi\*) AND children, accompanied with reference-mining and hand searching of literature. Only peer-reviewed articles published in English between 2017 and 2021, which include a focus on aspects of playground design/environment that influence usability/participation of children were included.

**【Results】** After removing duplicates, 108 articles

were screened for eligibility. Ten articles were reviewed, which resulted in four major themes: the value of playgrounds; physical environment factors; social environment factors; political environment factors. Findings indicated that playground have important value for children, families, and community at large. Regardless, physical and attitudinal barriers were frequently encountered by children that limit the usability and result in the feeling of exclusion. Inclusive playground provision is hampered by weak legislation and lack of knowledge among providers regarding designing for diverse users.

**【Conclusion】** Unsuitable play equipment and design contribute to making playground unusable for many children. However, stigma and negative attitude towards disability are the greater barriers to inclusion and participation. It is the duty of occupational therapists to address the issue of occupational injustice and advocate for children's right to play. Findings also suggested the need for future studies to investigate evidence-based practices for inclusive playground design.

## O-10

### 妊産婦の分娩施設選択に影響する要因に関する文献検討 -妊婦健康診査・出産・産後の医療やケアの要因に焦点をあてて-

○森田梓 1)

1) 東京大学医学部附属病院

キーワード：分娩施設選択, 影響要因, 文献検討

【目的】妊婦が分娩施設選択時に影響を及ぼした要因のうち、妊婦健康診査・出産・産後の医療やケアに焦点をあて明らかにすることを目的とする

【方法】医学中央雑誌 WEB 版で文献検索を行った。検索語を「出産 or 分娩」「施設 or 場所」「選択 or 決定」の3つをかけあわせて検索された14文献を対象とし、影響した要因の中から①妊婦健康診査②出産③産後の医療やケアに関わるものに分けて整理した。

【結果】①妊婦健康診査では、＜利便性＞＜丁寧＞＜スタッフへの要望＞＜3D/4Dエコー超音波検査ができる＞が要因であっ

た。②出産では、＜自然分娩できる＞＜出産方法が気に入った＞＜希望が考慮される＞＜体位や姿勢を拘束しない＞＜不必要な医療介入をしない＞＜付き添い＞＜早期母乳接触＞＜医療介入が必要＞という要因であった。③産後では、＜母乳＞＜育児＞についての十分なケアや指導、＜継続した支援＞が要因であった。

【考察】妊婦は出産に関して快適性を求め具体的な希望があるため、分娩施設選択に必要な情報提供の実施と、慣用的な医療介入や分娩時の体位の拘束については見直しの必要性が示唆された。

## O-11

### 「暮らしの保健室」の活動報告と今後の活動課題

○石井佳子 1), 島田 恵 2), 岡本有子 2), 木村千里 2), 福井里美 2), 増谷順子 2), 菱沼由梨 2), 巖 千晶 2), 吉川杏依 3)

1) 東京女子医科大学 東医療センター 2) 東京都立大学大学院 人間健康科学研究科 3) 陽だまり訪問看護ステーション駒込

キーワード：暮らしの保健室, 健康相談

【背景】秋山正子氏が2011年に開始した「暮らしの保健室」は、全国に拡大し、6つの機能「相談窓口」「安心できる場」「交流の場」「連携の場」「育成の場」「市民との学びの場」が様々な形態で実施されている。東京都立大学でも、2019年4月から看護学科教員有志と在宅看護専門看護師が荒川キャンパスで開始し、2021年4月からは、荒川区内の商店街で週1回3時間開室している。

【目的】暮らしの保健室の今後の活動について検討する。

【方法】2019年度および2021年度の活動状況を概観し6つの機能の観点から現状と課題を分析した。

【結果】2019年度は20回開催し来室者はのべ61名であった。2021年度(7月まで)の来室

者はのべ202名で男性59名、女性143名、年齢は70代が70名と最も多く、次いで80代が48名であった。相談者は50名(24.8%)、複数回の来室者は15名で2回が6名、3回が5名、4回以上が4名であった。相談内容は、外来受診に関する相談が多く、介護のストレスなど生活上の困り事についての語りを傾聴するというものもあった。

【考察】まず「相談窓口」「安心できる場」として徐々に認識されてきた。今後はイベントを開催するなど来室者同士の「交流の場」とする機会を増やすとともに、荒川区内の関連機関との「連携の場」や大学生・院生の「育成の場」「市民との学びの場」としての運営についても企画していく。

## O-12

### 集中治療部における新人看護師の経験に関する文献検討

○土屋若菜 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科  
キーワード：集中治療部, ICU, 新人看護師

【目的】集中治療部に配属となった看護師には極度の緊張の連続の中で危機的状態にある患者の対応をすることが求められており、それは看護経験が少ない新人看護師においても同様である。どのようにして新人看護師は集中治療部という場の中で看護を行っていく経験を成り立たせているのかという疑問を持ち、これまでに集中治療部における新人看護師の経験に関するどのような研究が行われているのかを明らかにすることを目的として文献検討を行った。

【方法】医中誌 Web・PubMed を用いて2020年までの原著論文を検索した。「集中治療室」「クリティカルケア」「ICU」の3つに対しそれぞれ「新人看護師」および「経験」を付記して検索し38件の研究を検討の対象とした。

【結果】文献の検討を行った結果【ICUにおける先輩看護師と新人看護師の関係】【ICUで必要な看護能力】【新人看護師の自己評価】【ICUで新人看護師が感じる困難】の四つの切り口に整理することができた。

【考察】ICUに勤務する新人看護師を取り巻く人間関係や学習が求められる看護能力、さらに新人看護師自身の感じている困難の内容が明らかとなった。ICUに配属された新人看護師は重症の患者が多くシビアな判断が求められる場において常に緊張状態にあり、そこから得られるエピソードには低感情体験が多く含まれていた。感じている困難には職場への適応といった環境の側面、重症患者を看るといった行動の側面があることが考えられた。

## O-13

### 脊椎固定術後早期の神経症状における徒手療法の効果 -ランダム化比較試験

中村拓海 1)2), 山田郁朗 1), 来間弘展 2)

1) 東京都教職員互助会三楽病院整形外科リハビリテーション室 2) 東京都立大学人間健康科学研究科

キーワード：脊椎固定術, リハビリテーション

【目的】脊椎変性疾患は腰背部や下肢の疼痛や痺れといった神経症状を引き起こすため、治療法として脊椎固定術がよく用いられている。術後、遺残する神経症状に対して、神経モビライゼーション(Neuro Mobilization: NM)と軟部組織モビライゼーション(Soft Tissue Mobilization: SM)について効果が報告されているが、術後早期の効果を比較した報告は見当たらない。そこで、脊椎固定術後早期の神経症状に対する、NMとSMの効果について検証していくことを本研究の目的とした。

【方法】脊椎固定術を受けたもので、NM群とSM群に無作為に分け、術後2週間介入することができたものを対象とした。通常理学療法を30分間実施後、NM又はSMを10分間行った。評価項目は、Visual

Analog Scale(VAS: 腰痛・臀部又は下肢痛・下肢の痺れ)・JOA Back Pain Evaluation Questionnaire (JOABPEQ: 疼痛関連障害)・painDETECTとし、術後1週目の月曜日と2週目の金曜日に評価した。

【結果】対象者はNM群12名、SM群12名であり、脱落者を除いた対象者はNM群10名、SM群10名であった。SM群は群内に有意差がみられなかったが、NM群はVAS(腰痛)、JOABPEQ、painDETECTで群内に有意差がみられた。群間比較では、VASは腰痛( $F=3.34$ ,  $p=0.08$ ,  $n^2=0.02$ )、下肢痛( $F=1.79$ ,  $p=0.19$ ,  $n^2=0.08$ )、下肢痺れ( $F=0.33$ ,  $p=0.57$ ,  $n^2=0.01$ )であり、下肢痛のみ中程度の効果がみられた。

【考察】術後早期のため自然回復が否定できないが、SMよりもNMの方が痛みに対

して効果が高い可能性が示唆された。術後痛の早期軽減のために、神経症状に対して

神経系のアプローチも必要ではないかと考える。

## O-14

### 前額面での主観的正中定位評価法の検討

○沼尾拓 1)3), 市川恭兵 2), 網本和 3)

1) 社会医学技術学院 理学療法学科 2) 新座病院 3) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科

キーワード：主観的正中定位, 半側空間無視

【目的】半側空間無視患者は空間内の主観的正中定位 (Subjective straight ahead: SSA) が右へ偏倚する。この現象を測定する方法として Straight ahead pointing (SAP) もしくは open loop pointing (OLP) などの方法がある。近年、USN 患者は水平面内だけでなく、前額面での認知のずれが示唆されている。今回体幹前方前額面にタッチパネルを配置し、左右上下も含めた前額面内での偏倚を測定し、まず健常成人での測定を行った。また、従来の SSA 測定のための SAP は閉眼、OLP は開眼で行うため、前額面内での測定でも閉眼と開眼を比較した。

【方法】25 歳—30 歳の男女 7 名を被験者とした。足底接地、椅子座位をとらせ、体幹より前方 50 cm に置いたタッチパネルの体幹正中、剣状突起の高さをクロスラインレ

ーザーで特定した後、本人が正中・剣状突起の高さの真正面と思われるタッチパネルの場所を人差し指で触れる課題を閉眼、開眼それぞれ 10 回ずつ行わせ、タッチ位置を測定し、正面からの偏倚を記録した。

【結果】開眼では左右方向では正中位置より右へ  $4.5 \pm 40.4\text{mm}$ 、上下方向では剣状突起より上に  $1.0 \pm 8.4\text{mm}$  の位置を示した。閉眼では左右方向では左へ  $18.4 \pm 26.9\text{mm}$ 、上下方向では下に  $3.9 \pm 4.6\text{mm}$  の位置を示した。

【考察】開眼条件では大きな偏倚は観察されなかった。閉眼条件では有意な Leftward bias が観察された。上下方向に関しては閉眼開眼ともに大きな偏倚がないことが示された。この結果を基に USN 症例についても、三次元での正中認知の偏倚の分析が可能と考えられる。

## O-15

### 頸部筋振動刺激と体幹筋振動刺激の組み合わせが立位足圧中心へ及ぼす online effect と after effect の比較

○廣澤全紀 1)2), 網本和 1)

1) 東京都立大学大学院人間健康科学研究科理学療法科学域 2) 東京都リハビリテーション病院リハビリテーション部理学療法科

キーワード：頸部振動刺激, 立位足圧中心

【目的】頸部筋と体幹筋への振動刺激の組み合わせが、振動刺激中と刺激後に立位足圧中心に及ぼす効果について明らかにすることを本研究の目的とした。

【方法】対象は健常者 10 名 ( $25.7 \pm 2.7$  歳)

とした。振動刺激は周波数 80Hz に設定し、(1) 左頸部 (僧帽筋上部) のみに 10 分間、(2) 左頸部と左体幹 (腰部多裂筋) に 10 分間の振動刺激の 2 条件を実施し、①刺激前、②刺激中 (5 分経過時)、③刺激終了直後、④刺激終了後 5 分経過時に、立位足圧

中心の xy 座標の平均位置 [mm]、軌跡長 [cm]、矩形面積 [cm<sup>2</sup>] を測定した。統計解析は刺激条件ごとに時間経過を要因とした反復測定分散分析を実施した。分散分析に有意差を認めた場合は、多重比較を行なった。統計処理の有意水準は 5% とした。

【結果】(2) の刺激条件では、閉眼と開眼立位における x 座標の平均位置に有意な差を認めた。多重比較の結果、閉眼立位では①と②・④の条件間において  $2.4 \pm 1.0$  (平均値の差  $\pm$  標準誤差)、 $2.6 \pm 0.7$  左方へ有意



な偏位を認めた。開眼立位では、①と④の条件間において  $2.7 \pm 0.7$  左方へ有意な偏位を認めた。

【考察】本研究の結果から、体幹筋振動刺激を組み合わせることによって閉眼・開眼

ともに立位足圧中心は刺激後 5 分経過時に刺激側（左方）へ偏位し、閉眼立位では刺激中にも刺激側へ偏位することが示唆された。

## O-16

### 重度認知症高齢者 2 事例における非言語的な表出に関する報告

○金井千秋 1), 小林法一 2)

1) 東京都立大学院人間健康科作業療法科学域博士前期課程 2) 東京都立大学院人間健康科学研究科

キーワード：認知症、非言語的な表出、認知症高齢者の絵カード評価法

【はじめに】重度認知症でも本人の意思を汲み取った意味のある作業を実施することは作業療法支援にとって重要である。認知症高齢者の意味のある作業を明らかにする評価では絵カードを用いる方法がある。井口らが開発した「認知症高齢者の絵カード評価法(以下、APCD)」は 70 枚の絵カードから構成されており、改訂版長谷川式知能検査(以下、HDS-R)得点が 10 点以上の認知症高齢者に標準化されている。しかし、臨床では HDS-R10 点以下の認知症高齢者にも非言語的な表出を手掛かりとした応用が可能である。本研究では、重度認知症へ APCD を実施した際にみられた非言語的な表出について報告する。

【方法】重度認知症高齢者(2 名)に絵カードを手渡し、その際に見られる非言語的な

反応を観察した。

【結果】[事例 1]80 代前半、女性。特定の絵カードに対し注視時間が長くなる傾向がみられた。声かけあり・なしで 2 度実施したところ、注視時間が長くなるカードは一致していた。[事例 2]80 代後半、女性。特定の絵カードのみ注視時間が長く、他の絵カードよりも声かけをしている評価者へ注意を向けて発話内容に耳を傾ける様子が窺えた。

【考察】今回の対象者に見られた「注視時間」や「絵カードの把持時間」、「評価者に向ける注意」などの反応は、自分にとって意味のある作業（が描かれた絵カード）であることの意味表示かもしれない。重度認知症者であっても、絵カードにより意思表出できる可能性が示唆された。

## O-17

### 介護老人福祉施設を利用している高齢者の潜在ランク理論に依拠した直接生活介助行為のランクに関する研究

○張英恩 1), 高橋順一 1), 出井涼介 1), 山梨敦也 1), 中嶋和夫 1)

1) 地域ケア経営マネジメント研究所

キーワード：介護老人福祉施設、直接生活介助行為、潜在ランク理論

【目的】本研究は介護老人福祉施設（以下、「特養」）の利用者に対する直接生活介助行為の順序性（段階）を潜在ランク理論に依拠して検討することを目的とした。【方法】対象は調査協力が得られた 11 か所の特養で生活する要介護度が 3 以上の高齢者 585 人とした。倫理委員会の審査を経て、特養の調査員が本人もしくは家族に調査参加への承諾を得た。解析データは、介護職員が電子媒体に記録した 30 日間における直接

生活介助行為 29 項目（食事：7 項目、排泄：5 項目、入浴：6 項目、更衣：6 項目、整容：5 項目）における提供の有無とした。直接生活介助行為の順序性の検討には潜在ランク理論（Shojima のニューラルテスト理論）を採用した。その前提として直接生活介助行為 29 項目の一次元性を項目反応理論と確認的因子分析で検討した。最終的な潜在ランク数（段階）は CAIC および BIC の変動状況を基礎に判断し、そのランク数の適

切さは CFI および RMSEA で判断した。解析には Mplus 8.2 ならびに Exametrika 5.5 を使用した。

【結果】統計解析の結果 29 項目の介助行為のうち 15 項目での 1 因子モデルがデータに適合した。この 15 項目の潜在ランクの数は 4 段階であった。【考察】本研究では直接生

活介助行為 15 項目において順序性を満たす段階が想定できることを明らかにした。それは特養の要介護高齢者に提供すべき介助行為を、科学的根拠をもってその程度を段階として見える化できることを示唆している。

## O-18

### 機械学習手法を用いた介護老人福祉施設利用者の要介護度に関する予後的予測モデルの開発

○出井涼介 1), 高橋順一 1), 張英恩 1), 山梨敦也 1), 中嶋和夫 1)

1) 地域ケア経営マネジメント研究所

キーワード：機械学習, 要介護度, 予後的予測モデル

【目的】本研究は機械学習手法を用いて介護老人福祉施設（以下、「特養」）の利用者の要介護度に関する予後的な予測モデルを開発することを目的とした。【方法】本研究では、研究協力が得られた 11 か所の特養の利用者 484 人分のデータを予測モデル開発と精度検証に使用した。本研究では、ラベル（従属変数）は 2018 年 10 月時点の要介護度あるいは死亡とし、予測変数には 2017 年 10 月時点の要介護度、中枢神経変性疾患および脳血管疾患の医学的診断、精神機能、認知症行動症状、排尿・排便コントロール、ロコモーションの自立、セルフケア活動の自立に関するデータを使用した。予測モデルの開発では 484 人分のデータを学習データ（80%）とテストデータ（20%）に分割した。学習データを用いて予測モデルを開

発した後、開発した予測モデルの精度をテストデータで確認した。予測モデルの開発に用いる機械学習手法はランダムフォレストを採用した。本研究は倫理委員会の承認を得て実施した。【結果】開発された予測モデルのテストデータにおける精度は、正確度 (accuracy) 78.6%、PPV (macro weighted) 77.3%、感度 (macro weighted) 78.6%であった。【考察】本研究では、介護事業所の業務上で収集可能なデータに機械学習を適用することで一定の精度を持つ予測モデルが開発可能なことを明らかにした。そのモデルは、利用者個々人の将来に向けての介護サービスの再最適化やケアプランの策定計画において重要な役割を果たすものと期待できる。



## 第 31 回 日本保健科学学会学術集会実行委員会

学術集会長：織井 優貴子（東京都立大学大学院人間健康科学研究科）

準備委員：浅川 康吉，飯塚 哲子，池田 由美，石橋 裕，井上 薫，巖 千晶，大嶋 伸雄，  
奥村 朱美，織井 優貴子，儀間 裕貴，来間 弘展，佐藤 葉子，縞谷 絵里，  
関根 紀夫，高畠 賢，張 維珊，根岸 徹，畑 純一，廣川 聖子，古川 順光，  
前田 耕助，増谷 順子，渡邊 賢（五十音順）